第３回　　テーマ　　「困っている子どもの理解と支援」

・期　日　　平成２３年１１月１１日（金）１、２時限
・受講者　　学生　２１人　（４年次２０人、大学院生１人）
・学部教員　　井門正美教授（教職実践演習実施委員会委員長）
　　佐藤修司教授、佐川　馨准教授
・担当教員　　斎藤　孝客員教授、神居　隆特任教授、石橋研一客員教授

◆外部講師の紹介

外部講師である県立栗田養護学校・佐藤圭吾教育専門監の紹介等（斎藤客員教授）

◆講義「困っている子への支援のポイント」

佐藤教育専門監が、スライドやＶＴＲをもとに次の内容で講義を行った。

○　発達障害の子どもの行動特性や学習の状態について
○　学習を成立させるための手立てについて
○　学級全体への支援やリソースの活用について

自閉児の行動変容の様子を映像で視聴したほか、文字の変換規則に沿って文章を完成する疑似体験などを行うことで、学習障害のある子どもへの理解を図ることができた。

また、佐藤教育専門監は、「氷山モデル」をもとに子どもの隠れている行動の原因をしっかりと把握すること、学習上のルールやきまりなどを事前に示してあげること、褒める場合は０．５秒以内にすることなど、支援のポイントについて分かりやすく解説した。

◆演習

次の３つの事例について、小グループに分かれて協議を行い発表した。

まとめとして、佐藤教育専門監から、子どもの困り感に寄り添った支援が大切であること、子どもの得意な面を生かすような場面設定や活動を取り入れること、子どもの成功体験を多くしてやること、未学習のことは丁寧に教えてやることなどの具体的な助言をいただいた。

◆リフレクションノートから

・困っている子どもが感じていることについて、わずかであるが実感することができた。
・困っている子どもの一人一人の状況は違うので、その都度丁寧に対応していきたい。
・疑似体験を通じて子どもの状態が感じられた。大人から見てなぜ出来ないのだろうかと思うが、困っている子どもの目線を忘れないようにしたい。
・支援は子どもの理解から始まるということが分かった。「ほめる」ことを大切にしていきたい。

◆資料　演習課題

◆ケース１　学習面で困っている子ども

　小学３年生のＡさんは、周りの子どもとのコミュニケーションは特に問題はみられませんが、教科書を読む学習で、次のようなことがよく見られます。
・前の行の続きと違う行を読むことがある。
・よく似た文字を読み間違うことがある。
・みんなと一緒に教科書の文字を追えないことがある。
・どこを読んでいるか分からなくなり、落ち着きがなくなることがある。

◆ケース２　行動面で困っている子ども

　今年度から担任している小学４年生のＫくんのことです。
　Ｋくんは、音読や計算は得意であり、学力には特に問題がありません。ところが、課題に向かう時なかなか集中ができず、周りの子に話しかけたり、席を立って歩き回ったりします。その都度、担任が注意しますが、状況はあまり変わりません。
　最近では、周りの子も担任と同じように注意するようになってしまいました。

◆ケース３　対人関係で困っている子ども

　中学１年のＳくんは、小学校時代にアスペルガー症候群と診断されています。
　Ｓくんは親しい友達ができず、「友達がほしい」と担任に訴えてきます。
　また、Ｓくんは特定の友達にしつこくかかわりを求めたり、自分の好きなゲームの話を一方的にしたりします。その都度、担任はＳくんに注意をするのですが変わりません。